

令和元年度（2019年度）自治体職員協力交流事業
協力交流研修員 研修報告書

2019 Local Government Officials Training Program in Japan
Trainee Reports



一般財団法人 自治体国際化協会

Council of Local Authorities for International Relations

はじめに

総務省及び一般財団法人自治体国際化協会では海外の自治体等の職員を受け入れることについて、財政面や受入実務面での支援を行うための「自治体職員協力交流事業」を展開しています。

平成8年度より創設された自治体職員協力交流事業も24年目を迎え、38の国と地域から1,190名が本事業に研修員として参加されました。令和元年度（2019年度）においては8カ国から23名の研修員が様々な分野で実り多い研修を行いました。

本事業は「ひとづくり」を通じた国際協力事業の1つではありますが、研修員の皆さんが日本の自治体の有するノウハウ・技術を習得され、帰国後、日本における研修の成果や経験をそれぞれの職場において大いに活かされ、また、自治体間の国際協力・交流の貴重な架け橋として活躍されていると伺っております。

そうした研修員の日本での奮闘ぶり、研修の成果を各方面の方々のご協力のもと、令和元年度も報告書として編集することができました。全事例でなく、国際交流や技術の習得に加えて、研修員本人のノウハウが自治体の行政施策の実施や問題の解決に貢献している事例等を中心に8事例を選定し、ダイジェスト版として掲載しております。

この報告書が研修員派遣国や今後研修員の受け入れを予定されている各自治体において活用していただけたら幸いです。

最後に、研修員の受け入れにご尽力されました各受入自治体及び関係機関の皆様方に対して、心よりお礼を申し上げます。

一般財団法人自治体国際化協会
交流支援部 経済交流課

＝令和元年度（2019）年度自治体職員協力交流事業スケジュール＝

2019年

4月19日（金） 受入自治体担当者会議

東京研修

5月19日（日） 協力交流研修員の来日 ルポール麴町泊
5月20日（月） 開会式
オリエンテーション
受入自治体との面談 ルポール麴町泊
5月21日（火） 日本語レベルチェック
都内視察：江戸東京博物館等 ルポール麴町泊
5月22日（水） 東京から滋賀（JIAM）へ移動

全国市町村国際文化研修所（JIAM）研修

5月23日（木） 開講式
日本語研修開始 授業：70分×68コマ（6月19日まで）
または105コマ（7月3日まで）
5月29日（水） 日本伝統文化講義
6月8日（土） 日野町内視察
6月14日（金） 地方自治財政講義
6月15日（金） 所外学習（京都防災センター）
6月19日（水） 成果発表会
6月20日（木） 4週間研修閉講式
7月3日（水） 所外学習（唐崎中学校）
7月4日（木） 6週間研修閉講式

専門研修

6月21日（金） または
7月5日（金） 受入自治体における専門研修開始

研修員の帰国

11月下旬～5月にかけて順次帰国

2019(令和元年度)年度自治体職員協力交流事業 協力交流研修員名簿

No.	都道府県	市町村	NAME	シメイ	国名	所属団体	研修分野
1	北海道	旭川市	Park Lan	パク ラン	大韓民国	水原市	一般行政
2	北海道	滝川市	Bayarsaikhan Munkhbat	バヤルサイハン ムンフバト	モンゴル国	ウブスハンガイ県	建設
3	北海道	滝川市	Tsedendorj Tsend-ayush	ツェデンドルジ ツェンデアユシ	モンゴル国	ウブスハンガイ県	建設
4	北海道	滝川市	Ganbold Khajidmaa	ガンボルド ハジドマー	モンゴル国	ウブスハンガイ県	建設
5	北海道	滝川市	Genden-Ochir Davaasuren	ゲンデンオチル ダヴァースレン	モンゴル国	ウブスハンガイ県	農業
6	北海道	滝川市	Naranmandakh Enkhtuvshin	ナランマンダフ エンフトゥブシン	モンゴル国	ウブスハンガイ県	農業
7	北海道	滝川市	Nyamdorj Oyumaa	ニヤムドルジ オユマー	モンゴル国	トゥブ県	農業
8	北海道	滝川市	Tsogt Enkhzorig	ツォグト エンフゾリグ	モンゴル国	トゥブ県	農業
9	岩手県	-	Qu Yanfang	キョク ゲンホウ	中国	大連市	国際交流協力
10	富山県	-	Pucineli Fabio Augusto	プチネリ ファビオ アウグスト	ブラジル連邦共和国	サンパウロ州	教育
11	富山県	黒部市	Shim Keunhwa	シム ケンファ	大韓民国	三陟市	一般行政
12	山梨県	-	Marques Diniz Martins Vitor	マルケス・ジニース・マルティンス・ヴィートル	ブラジル連邦共和国	ミナス・ジェライス州	スポーツ
13	岐阜県	高山市	Feng Hui	フェン ホイ	中国	麗江市	医療
14	岐阜県	高山市	Quispe Auccapuma Yoni Yuvica	キスケ アウカプーマ ジョニ ジュビカ	ペルー共和国	ウルバンバ郡	観光
15	静岡県	浜松市	Wang JingJing	オウ セイセイ	中国	杭州市	友好関係・都市交流
16	滋賀県	-	Guo Feng	カク ホウ	中国	湖南省	観光
17	大阪府	堺市	Dang Thi Phuong Thuy	ダン・ティ・フオン・トゥイ	ベトナム	ダナン市	国際交流
18	鳥取県	-	Piao Zhenglin	ポク セイリン	中国	吉林省	国際交流
19	高知県	高知市	Rachmat Wibowo	ラハマト ウィボウォ	インドネシア共和国	スラバヤ市	廃棄物処理
20	福岡県	北九州市	Yogi Widodo	ヨギ ウイドド	インドネシア共和国	スラバヤ市	廃棄物処理
21	福岡県	福岡市	Khin San Win	キン サン ウィン	ミャンマー連邦共和国	ヤンゴン市開発委員会	水道・環境
22	長崎県	長崎市	Qu Xiaoyu	ク ショウウ	中国	中山市	社会教育
23	大分県	-	Li Ting	リ テイ	中国	湖北省	行政

令和元年度（2019）自治体職員協力交流事業（LGOTP）

報告書（ダイジェスト版）

目 次

1. 令和元年度自治体職員協力交流事業を実施して （ブラジル連邦共和国サンパウロ州）
研修報告 （富山県）
2. 日本での新しい挑戦 （大韓民国三陟市）
国際友好都市大韓民国三陟市との職員交流を通して （富山県黒部市）
3. Sports Public Policies and Sports Facilities in Yamanashi Prefecture
（ブラジル連邦共和国サンパウロ州）
山梨県・ミナスジェライス州友好交流の担い手育成 （山梨県）
4. FINAL REPORT （ベトナム社会主義共和国ダナン市）
令和元年度 自治体職員協力交流事業の報告について （大阪府堺市）
5. 自治体職員協力交流研修員研修報告書 （中国吉林省）
平成 31 年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修 （鳥取県）
6. 研修報告書 （インドネシア共和国スバラヤ市）
自治体職員協力交流研修員の受け入れについて （高知県高知市）
7. Final Report for Local Government Officials Training Program 2019
（ミャンマー連邦共和国ヤンゴン市）
令和元年度自治体職員協力交流事業 報告書 （福岡県福岡市）
8. 研修を通して、人生の目標が明らかになった （中国湖北省）
湖北省研修員の受入について （大分県）

多文化共生推進研修員

氏 名： プチネリ ファビオ アウグスト

国 籍： ブラジル

研修科目： 教育



〔 研修報告 〕

1 本事業に応募した理由

1988年にテレビで「Karate Kid」（邦題：ベスト・キッド）というアメリカ映画を見て、私も空手を習いたいと思い、すぐに空手を始め、最初の稽古の時から私は空手が大好きになりました。空手から私の日本への興味が始まりました。

私は、ただ空手の先生になるのではなく、良い空手の先生になりたいと思いました。「良い指導者になるには大学で勉強しなさい」と父は私に言い、そして、カンピナス大学で体育を勉強しました。そして、今年、富山県のブラジルの児童へのサポートと、日本の教育システムの学習のために日本に来る機会をいただきました。

2 研修の概要

5月に成田空港に到着し、CLAIRのスタッフに迎えに来ていただき、他の研修員達と会いました。その後、東京で三日間過ごし、オリエンテーションをしました。東京では江戸東京博物館と国会議事堂を見学しました。23日に滋賀県唐崎のJIAMに移動し、毎日午前9時から午後5時まで日本語の授業を受けました。毎日宿題と漢字テストがありました。私は勉強するために毎朝5時には起きました。そこで色々な大事な経験ができました。例えば、茶道とホームステイでした。



(JIAMでの研修)

JIAMには、あるラテン語の文章がありました。「LABORI NIL IMPOSSIBLE」頑張ったら、何事も不可能はないという意味です。勉強が大変だと思う度、その言葉を心に浮かべていたことを思い出します。

JIAMでは食事がすべて提供されるので、朝昼晩の御飯は無料でした。食事を食べる時には5つの言語で話していました。ポルトガル語、スペイン語、日本語、英語とボディランゲージです。

6月20日に富山県に引っ越しました。生活が大きく変わりました。アパートはとても綺麗ですしどこに行くにも便利なところですよ。自転車もありました。次の月曜日に学校で挨拶をし、27日から研修が始まりました。教頭先生と朝は8時15分まで

に職員室に行くよう約束をしました。初日は何をするのか見当がついていませんでしたが、先生方は私に学校を紹介してくださいました。

職員室には私専用の机とパソコンがありました。職員室は広いです。実はブラジルに職員室はありません。

さて、とうとう私の研修が始まりましたが、その時から、大変な日々が始まりました。というのも、JIAMで他の外国人や先生とは日本語で話していましたが、日本語のクラスもよく分かっているつもりだったのですが、富山に着いた途端、自分は本当の日本語が出来ていないと痛感しました。学校で話すのはとても大変でした。おそらく、会話の5%も理解できていなかったと思います。日本人の日本語と外国人が話す日本語教室の日本語は本当に違います。例えるなら、日本語教室の日本語は自動車学校です。自動車学校での運転は安全ですし、予測可能です。しかし本当に日本語は毎日がチャレンジです。このレポートを書くのも私にとっては大きなチャレンジです。残念ながら、もっと色々書きたいことがあります。私の力は及ばず、おそらくすべて書くのは無理でしょう。

野村小学校で最初に出会ったブラジルの児童とは、私の方から日本語で喋りかけました。その時、自分はここで何をしているのだろうと疑問に思いました。日本語が分からない児童にサポートをしてあげることが私の役目のはずですが、彼は私より日本語が上手でした。自分の役割はなんだろうか、自問自答を繰り返す日々でした。

しかし、研修を進めていくと、困っているのは言葉の問題だけではないことが見えてきました。何でも、わからないことがあればとにかくサポートをすることが私の使命です。しかし、私は自分の教え方に全く自信を持っていませんでしたし、指導教室の先生方はポルトガル語も使わなくてもいいおっしゃいました。ここでまた、どうして自分はブラジルから来たのか、考えてしまいました。日本の教え方で、日本語のみを使う教室で、自分に何ができるか、見失いそうになっていました。

ところが、夏休みに入る一週間位前のお昼休みに、日本語指導教室に1本の電話が掛かってきました。ブラジル人の1年生の児童が給食を食べられず、片付けな



(研修場所：野村小学校)

ったため泣いてしまったそうです。私は彼女のもとへ行き、ポルトガル語で話をしました。すると、だんだんと落ち着き、泣きやんでくれました。私が学校に来た目的がこの時ようやく分かりました。サポートは日本語だけでなく、母語でも出来ますし、場合によってはその方が児童にとっては良いこともあります。

日本では子供たちが早くから責任を学びます。それは国際センターでのホームステイの時にも見受けられました。例えば、私が訪問したお宅では、壁に子供の片付けや掃除の予定表が貼ってありました。2人の子供たちは自分の家を大切にし、家だけでなく学校も大切に掃除をしていると言っていました。

学校の夏休みは7月22日から8月30日まででした。週1回、アレッセと高岡市役所で働きました。アレッセでは2時間外国人の生徒に対してサポートをしていましたが、数学を教えるのは少し大変でした。私はインターネットのビデオで教え方の復習をしました。市役所は午後1時から5時15分までの勤務で、2名のブラジル人と一緒に働きました。日本語、富山、高岡についてよく学んだ期間でした。

3 帰国後、母国での研修の活かし方

野村小学校では、6限が終わった後、ほとんど毎日空手の稽古をしていました。そんなある日、5～6年生の児童が稽古を見て、「すごい！柔道だよ」と言っているのが聞こえてきました。びっくりしました。その児童は空手も柔道も見たことがなかったようです。子供だけでなく、日本人でも皆が知っているわけではないのですね。特に、私が師事している沖縄空手についても広くは知られていないのかもしれない。

それは、私にとって良い研究のテーマになるはずです。なぜ日本の小学校では、日本の武道について教えていないのか。技だけではなく、歴史と文化についてもどこにも教えられていません。

すべての経験はその基礎に反響し、新たな意味と視点が自分の世界観に反映され、自己の再構成につながります。日本での経験は私にとって最も重要な再構成であり、その影響は私の教育実践だけでなく、行動や選択において、今後新たな体験を可能にすることでしょう。

—主観の構築は世界宇宙論の結果として、歴史的に様々な人間関係に浸透するパラダイムを通じて与えられる。—

令和元年度自治体職員協力交流事業を実施して

自治体名：富山県
研修員名：プチネリ ファビオ アウグスト
派遣元自治体：ブラジル サンパウロ州
研修分野：教育
研修期間：6か月
主な研修先：高岡市立野村小学校

1 背景・目的

本県では、海外からの技術研修員の受け入れを積極的に行っており、これまで、南米諸国、友好提携先等、その他開発途上国に対する技術協力事業の一環として技術研修員を受け入れ、さまざまな分野の技術移転により母国の経済開発に貢献しうる人材を養成するとともに、研修員と県民とのふれあいを通じて国際親善に寄与してきた。

一方で、近年の県内外国人住民の増加や定住化に伴い、日系ブラジル人をはじめとする多くの外国籍児童が、日本の小学校で言葉や文化の違いに戸惑い、悩みを抱えているという現状があり、多文化共生に配慮した教育環境の整備も課題となっているところである。

このため富山県では、平成 21 年度より、ブラジルサンパウロ州から教育経験のある人材を受け入れ、ブラジル人児童が多い小学校で、ポルトガル語やブラジル文化に配慮した学習支援を実施するとともに、外国籍児童の保護者に対して日本の教育制度等の理解促進に努めることを目的とした「多文化共生推進研修員受入事業」を実施している。

2 研修概要

日本の教育制度の理解、外国籍児童への学習支援

3 事業実施にあたって工夫、苦勞したこと

研修受入先の小学校では夏休み期間中は児童が登校しないため、研修することがない、と相談を受けたため、県から夏休み期間中の学校外での研修を提案した。具体的には高岡市役所内の外国人相談窓口への派遣や、外国人児童・生徒の学習指導に取り組む団体の活動への参加、外国人児童生徒教育実践講座の受講を研修として行ってもらった。小学校以外での研修の機会として、研修員本人にとっても有意義なものになった。

4 成果・課題

ファビオ研修員はとてもまじめな性格で研修に対する意欲も十分であった。日本語については、「早口だと理解できないこともあるが、日々勉強をしている」と本人が言う通り、研修中に語学能力が向上していた。本県での研修が始まると、熱心に研修に取り組み、研修先の野村小学校と外国籍の保護者との橋渡し役をつとめた。

本県独自で受け入れている他の 5 名の研修員との関係もとても良好で、定例のミーティングや立山登山を通して親睦を深めていたようである。

研修員には、帰国時に「とやま名誉友好大使」を委嘱したところであり、帰国後は、本

県で習得した技術を活かして活躍するとともに、本県と各省州との友好交流の架け橋としての役割を果たしてもらえよう願っている。

ブラジルサンパウロ州は、富山県にとって人的交流にとどまらず、経済、観光、環境等の各分野における本県の重要なカウンターパートであり、今後ますます関係は強いものになると感じている。過去に協力交流研修員として来県した方で、帰国後、各分野で本県との交流の中心人物として活躍されている方は多く、ファビオ研修員も、今後、本県との橋渡し役として活躍してくれるものと期待している。



立山登山



研修修了式

『 日本での新しい挑戦 』

氏 名 : シムゲンファ (SHIM KEUNHWA)
出身国 : 大韓民国
受入自治体 : 富山県 黒部市
研修先 : 黒部市役所 企画政策課



1. 本事業に応募した動機

2年前、市役所の職員が黒部市へ交換勤務をしに行くのを見てとても羨ましく思っていました。その時から私もいつか行こうという考えを持っていました。

昔から日本語について関心があって、日本語と日本文化を良く知ることでできる機会になると思いました。私の家族も応援してくれて本事業に挑戦することになりました。そして、私の人生で二度と来ないチャンスだ、という思いで機会をえることができました。

2. 研修の概要

黒部市役所の各部署がする仕事と部署が管理している施設を見学して、三陟市との違う事、似ている事について調べました。そしていろいろな活動に参加して一般市民との交流もしました。このような活動を通じて、お互いの文化と人々の考えを知れる機会になりました。特に、シルバー人材センターで行っていることはとてもいい制度だと思いました。高齢者に仕事と賃金を提供し、その賃金は市ではなく会社や個人が支払っていました。

そして、外国人が参加する防災訓練もいい制度だと思います。国際文化センターで、外国人と一般市民が交流していることも知れました。三陟市でも多文化センターがありますが、主に結婚して三陟市に住んでいる女性が利用しています。外国人の大学生、会社員、そして一般市民、みんなが参加出来るイベントが市民の国際感覚を向上させると思います。私も黒部市の国際文化センターで韓国料理を作って、外国人と一般市民に韓国と三陟市を紹介する時間を持ちました。私にとって最高に楽しい時間になりました。

また、富山県内と日本国内研修を通じて日本の美しい都市を訪れる機会も得ました。日本の小都市にも楽しい観光先や、美味しい食べ物がたくさんあると

感じました。研修を通して日本の行政、文化、人について調べる時間になりました。



国際文化センターでの交流イベント



外国人を対象とした防災訓練

3. 帰国後の展望

今回の研修は私にとって、忘れられないものになると思います。戻った後にも研修を通じて出会った友達と黒部市を忘れないです。これからも日本語の勉強をずっとして、もっと向上させて日本について、もっと多くの分野のことについて調べたいです。

三陟市の職員にも、私が研修を通じて経験したことを知らせて、活用出来るかを検討したいです。そして、黒部市がしているいろんな国際交流活動を見ながら、三陟市ともマラソン交流は勿論、観光や、様々な分野の交流につなげていくにはどうかすればよいか考えてみます。

そして、交流を通じて交換勤務をした職員との交流も繋げていくべきだと思います。このような交流が後になって大きな力になると思います。

また次に研修を希望する職員がいれば、言葉などについて、もっと準備をして、もっと多くの経験が出来るように助言をしてあげたいです。三陟市と黒部市、二つの都市がずっと友情を続けていくのを望み、私が黒部市で見て、感じたことを元に私が少しでも役に立ちたいです。



「 国際友好都市大韓民国三陟市との職員交流を通して 」

自治体名	富山県黒部市
研修員名	沈 槿 花 (SHIM KEUHWA)
出身国	大韓民国
研修分野	行政全般
研修期間	6か月（来日時点からの月数）
配属先	企画政策課

1 背景・目的

今回黒部市は国際友好都市である大韓民国三陟市との職員相互派遣協定に基づく両市の職員相互派遣事業を実施するにあたり、LGOTP を活用して研修員の受入を行った。

本協定は両市の職員を派遣することで、両市間の相互理解と信頼を醸成することを目的としたものであり、一時中断していたものの、2017年に14年ぶりに再開し、今回は再開後2回目の実施となった。

これまでも両市間で継続してスポーツによる市民交流事業や行政関係者による訪問事業などを行ってきた。いずれの事業とも本事業とは性質が異なるため、相互派遣事業では両市の職員との交流を通して両市を改めて知る機会とし、今後さらに両市の交流が活発になることを目的として実施した。

2 研修の概要

本市での研修は、6月20日から11月28日にかけて、市役所での研修並びに施設の見学を中心として実施した。また黒部市以外の日本についても学んでもらうため、県内研修を、国内研修を実施した。

<市役所各課研修>

行政研修として市役所の各課で研修を行った。研修では各課を順番に1日単位で回り、各課の担当業務の説明を受けるとともに、所管する施設見学なども含めた研修を行った。また沈槿花さんの本人の希望により、

高齢者福祉に関わる業務、特に退職後の高齢者が働くことについて、強い関心をもっており、関連業務にかかるものを重点研修と位置づけ研修を行った。特にシルバー人材センターでの研修においては、三陟市と異なる点が多く、三陟市で高齢者が活躍できるような取り組みをしたいと話していた。



黒部市シルバー人材センター研修

< 県内研修・国内研修 >

県内研修では、富山県の自然と風土について学ぶため、世界遺産の五箇山合掌造り集落や、高岡市の瑞龍寺などを視察された。

国内研修は、沈槿花さんの希望により、島根県と広島県を視察した。

島根県では、松江市と出雲市を視察し、日本の古い文化や歴史について学ぶとともに、文化・歴史を活かした観光の取り組みについて学んだ。また広島県では宮島を巡り、日本の文化などについて学ぶ一方、広島では原爆ドームや平和記念公園など戦争の影響とその被害について視察された。



国内研修：島根県出雲市

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

職員相互派遣事業が2年ぶりの実施となったため、研修員の受入全般に関する準備は前回は参考にして実施をした。特に研修内容については、できるだけ多くのことを知ってもらうべく、市役所全課に依頼して研修を実施できるよう調整をした。

また前回の反省に基づき、一般市民との交流機会を設けるため、研修員を講師としたイベントを2回実施した。あわせて、市職員が、研修員がどのようなことをしているのか、見聞きする機会が乏しく、相互派遣事業そのものへの関心が低くなりがちであるため、研修で学んだことを市職員向けに報告する機会を設けた。



職員向け報告会

4 成果・課題

本事業を通して国際友好都市である三陟市について改めて知ることができ、研修を通して、両市の違い、両国の違いについて学ぶことができた。

また今回LGOTPを活用し相互派遣事業を行ったことにより、来日から帰国までの手続きについて、滞りなく対応でき、安心感があった。また各自治体に派遣前に日本語研修が組み込まれていることは研修員にとっても、受入側としてもよかった。今後も本事業を継続するにあたり、来日する研修員の日本語能力については、コミュニケーションをはかるうえで大きく影響するため、事前の日本語講座については、是非継続していただきたい。

また、受入自治体として、今回一般市民との交流が図れるよう、各種行事・イベントへの参加を研修員に依頼し調整したことは、研修員からも反応がよかった。今後事業を継続するにあたり、研修の一環として考慮し、本事業をより活用できるよう努め、国際友好都市である両市の交流のさらなる促進に努めたい。

Sports Public Policies and Sports Facilities in Yamanashi Prefecture

氏 名	Vitor Marques Diniz Martins
出身国	Brazil
受入自治体	Yamanashi Prefectural Government
研修先	Global Tourism and Exchange Division of Yamanashi Prefecture



1 本事業に応募した動機 (Reasons for applying for this program)

Since I was young, I always liked politics and government issues. When I discovered the existence of a public administration graduation course, I noticed that this was right for me. I entered university and to improve my knowledge in the area I decided to study Law concomitant. The opportunity to learn ways to improve the welfare of the community motivated me to study both courses at the same time. As soon as we graduate in Public Administration course at Fundação João Pinheiro College, we are designated to work as a public servant at the government of the state of Minas Gerais. This graduation provides us a wide knowledge of the public sector allowing to labor in a variety of areas, as a policy maker or government manager.

I worked with procurement planning, contract management, knowledge management, among other areas, but I was always a fan of sports and the potential it has to improve life wellbeing of citizens. I volunteered during Fifa's World Cup in 2014, then worked on the bureau responsible to prepare Minas Gerais to receive the Rio 2016 Olympic Games, and finally on the sports promotion department, planning, monitoring and execution of sports policies. We held events, competitions, after-school projects, financing of high-performance athletes and maintenance of sports facilities, in order to stimulate the

practice of a variety of sports among children, adolescences and adults.

Unfortunately, the budget directed to sports was getting lower each year, despite of the importance of these policies for the healthiness and well-being of population. This situation has got worse after Rio 2016 Summer Olympics. There were no more the objective to win medals in our homeland, which was a great incentive for investments. Adding to that, historically, the citizen's opportunities to enjoy sports are very concentrated in just few options like soccer and volleyball. The government has not being able to provide chances to experience new sports, for example diversifying the facilities available, and not even giving properly maintenance for the existing ones.

In other hand, Japan is well-known by the important role that the government can take in providing welfare policies. Added to the good public healthcare system, the widely opportunities for sports practice probably plays an important role on the fact that Japan is the top country in life expectancy. From children to elderly people, Japan seems to have public policies that reach large amount of population with effectiveness. Also the culture, the history and the economic power of Japan are inspiring and always trigged my curiosity.

Being able to work at the government in Japan, learning and researching how public policies are planned, implemented and executed in the country seemed to fit perfect in the aim to find solutions to improve the effectiveness and reach more citizens with the public policies in Brazil, not only in the sports sector but in all fields of knowledge that I work during my career.

2 研修の概要

(Summary of Training)

(何を学び何を身に付けたかを含む。)

(What did you learn?)

First of all, learning the Japanese language was able to open my mind and increase exponentially the possibilities of knowledge during the program, which couldn't be reached just with English.

In Yamanashi I was allocated in the Global Tourism and Exchange

Division of the Tourism department. Like the others international trainees I was designated to promote the tourists spots of the province, visiting them and writing articles in Portuguese and English. Working at the tourism area enabled me to visit a lot of beautiful places and participate in interesting experiences, going deeper on the Japanese culture.

Between the regular works from the department, I dedicated to my field of research.

My goal was to identify which projects, strategies, and initiatives proposed by the Ministry of Education or Yamanashi Government body make the public education policy successful and egalitarian, in regular schools, and in special needs schools.

Main purposes are allowing students to have activities during the free time and promoting a lifelong sports experience.

The first thing that impressed me during the research was: in Japan public services doesn't mean free services. It's a paradigm hard to assimilate for a Brazilian, but sounds so natural for a Japanese citizen. In Brazil we are used with a government that provide all services like education (including university),



healthcare and sports facilities free of charge. Of course, it has a price to be paid, but instead of charging even a little bit from its users, the weight goes on the general taxpayers only. Another negative point is that you lost the opportunity of raising more money to improve the quality of the services, which is poor nowadays in Brazil, especially in education and healthcare system.

Besides having more money to invest, Japan also do more with the infrastructure that they have, especially in the sports area. Schools sport facilities are used during nights, weekends and

Takigyo (Waterfall Meditation) at Bentendo Waterfall in Hayakawa

vacations, either by students but also by the community. The bukatsu system, school clubs where students of different ages gather together to practice and improve skills in their favorite sports, gives the opportunity for students to choose from a variety of sports, going much beyond the regular physical education class.

, community sports centers held a multitude of events and competitions. Thanks to the bukatsu system and to the

What I have learned goes much further than my field of research. The respect with the others citizens, punctuality in any occasion, and the omotenashi power of going beyond others expectations, gives a sense of humanity that I will carry and practice during my whole life.

3 帰国後の展望

(Plans upon returning to your home country)

(本事業で得た成果を帰国後どのように活かしたいか)

(How would you apply what you have learnt on the program?)

First of all is important to notice that, as in any other comparison between countries, not all good examples of public policies held in Japan would fit copy paste in Brazil.

With that in mind and also remembering that my focus was to search for

projects that don't need extra financial assistance, I would suggest Minas Gerais Government to implement the following proposal: provide the opportunity for students to use school sports facilities during weekends and vacations; provide availability for the community to rent (for a small fee) school sports facilities; Study the possibility of regulation and implementation of bukatsus (clubs for sports, science and arts activities) in public schools, charge for usage of public community sports facilities; transfer the administration of sports



Visit to the sports facilities of Kose Sports Park in Kofu, Yamanashi

parks for associations; promote opportunities of volunteer in sports activities; allow sports teachers to rent public facilities and give classes; strength and expand sports competitions for students and adults with financial help of private sponsors.

However, I also came to notice that Japan is facing the same problem of lower government budgets year after year, especially for sports. And so, there are a lot of efforts for reducing costs and raising money. It will be important to keep in touch with the public servants that helped me during the research, not just to rely on them to collaborate with my challenges implementing the proposals in Minas Gerais, but also to keep updated with new ideas and projects held by Yamanashi Prefecture.

「山梨県・ミナスジェライス州友好交流の担い手育成」

自治体名 山梨県
研修員名 **MARQUES DINIZ MARTINS VITOR**
(マルケス デニース マルティンス ヴィートル)
出身国 ブラジル連邦共和国
研修分野 一般行政
研修期間 8か月 (来日時点からの月数)
主な研修先 山梨県観光部国際観光交流課

1 背景・目的

山梨県では、海外の自治体等から受け入れた職員等が本県の持つノウハウや技術等を習得して、当該職員の出身地の発展に寄与すること、また、本県滞在中に国際交流事業等への積極的な参加を通して地域の国際化を推進することを目的に、平成8年度から自治体職員協力交流事業を活用している。

当初はアジア圏から研修員を受け入れていたが、本県と姉妹州であるブラジル連邦共和国ミナスジェライス州との交流強化を図るために、平成25年度からは同州政府の職員を受け入れており、本年度はスポーツ局に所属するマルケス デニース マルティンス ヴィートル氏を迎えた。

2 研修の概要

本県では、協力交流研修員（以下、研修員）自身で設定したテーマについての自主研究と本県広報事業への参加を主な研修内容としている。

(1) 自主研究

ヴィートル研修員は、スポーツの愛好家であり、スポーツが市民の生活と健康を改善する可能性があることに興味を持っていたため、研究テーマを山梨県におけるスポーツ教育や公共政策とした。現在、ミナスジェライス州では、サッカーやバレーボール以外のスポーツはほとんど普及しておらず、教育分野や生涯学習分野においても習得する機会がない。本県において、スポーツ政策がどのように展開され、その費用はどのように捻出されているのか、また、どのように公共施設の維持管理が行われているのか等を調査するために、県内の教育機関（山梨大学、甲府中央高等学校）やスポーツ施設（小瀬スポーツ公園）を視察したり、同機関の職員への聞き取りを行ったりした。

また、ブラジルでは公共施設を市



県内のスポーツ施設を視察

民に開放するという概念がなく、同州において整備されたオリンピック・パラリンピック関連施設は、維持管理に係る費用等がなく、放置されている。そのため、本県でも導入が進んでいる PPP/PFI の制度について学ぶために、県内事例を紹介するセミナーにも参加した。

(2) 広報事業への参加



広報事業の取材で訪れたひまわり畑

山梨県の魅力を多言語で発信するため、本県や（公社）やまなし観光推進機構が行っている県内観光資源の取材に、国際交流員らと共にヴィートル研修員も参加し、ブラジル人としての目線で執筆した記事を寄稿してもらった。

3 研修実施にあたって工夫、苦勞したこと

ヴィートル研修員は、来日前の日本語学習歴がなかったため、当初は日本語によるコミュニケーションが困難であった。しかし、J I A Mでの日本語学習へ熱心に取り組み、本県滞在期間中は積極的に日本人との交流を図っていたため、日本語の上達が早かった。また、本人の学習意欲がとても高かったため、日本語で書かれた資料や、日本語で実施されるセミナー等、少しでも研究の参考になりそうなものがあれば本人へ情報提供し、本人もそれを積極的に活用していた。

一方、研究調査のための視察や聞き取りを他機関へ依頼した際には、本人が外国人であるという理由で、受け入れに強い抵抗感を持たれてしまうことがあり、協力を得るのにかなりの時間を要した。また、日本人にとっては一般的である体育の授業、部活動、生涯学習スポーツなども、ヴィートル研修員にとっては未知の事柄であり、視察等の調査を実施する前に、まず日本の基本的制度について本人の理解を深める必要があった。そして、本人の研究をサポートするためには、本事業の担当職員や通訳補助職員も、テーマに関する知識を備えておかなければいけないということを痛感した。

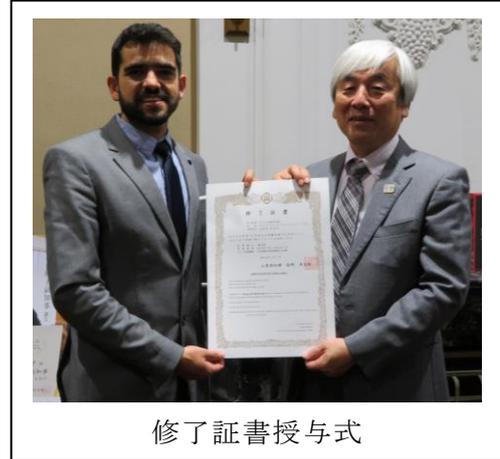
4 成果・課題

本県が近年受け入れている研修員は、ミナスジェライス州の政府職員で、州政府が研究テーマを決定し、それに即した人材として州政府の推薦を受けて派遣されているものである。そのため、同州が関心を持つ行政課題について、政府職員が研究することになるため、その研究結果は同州へ直接的かつ即時的に還元され、同州へ寄与することができる。

また、国際交流員が県内観光資源の取材やその記事の執筆、県ホームページへの掲載といった情報発信を行っており、研修員もそれに参加している。情報

発信を通して研修員らは自らの体験をもって本県を深く知ることになり、本県は外国人の目線からのアイデアを得ることができるだけでなく、情報発信の過程は地域のコミュニティと接する機会ともなっているため、地域の国際化推進にも役立っている。

本県ではこれまで、ミナスジェライス州政府で活躍する優秀な職員を研修員として受け入れてきた。本事業は本県と同州の友好関係を維持する重要な手段となっており、姉妹県州交流の担い手となる人材を育成できたことが大きな成果である。しかし一方で、過去の研修員に関するフォローアップができていないという大きな課題がある。今後は、研修員の帰国後も交流を維持し、そのネットワークを活用できるように、本県と研修員、そして研修員同士が継続的に連絡を取り合える環境を整えていく。



修了証書授与式

FINAL REPORT

Name: Dang Thi Phuong Thuy

Country: Viet Nam

Host institution: Osaka Prefecture, Sakai City

Training facility: Sakai Culture and Tourism Bureau, International Affairs Department, ASEAN Exchange Promotion Division



1. Reasons for applying for this program:

First of all, your training policies left a very good impression on me. I heard a lots about how patient the Japanese people could be to train a newcomer or a newbie, and the concept of lifetime employment. Wanting to experience this personally, I applied for this program upon hearing the news about it.

I'm also very fond of the Japanese culture and lifestyle. Growing up reading mangas and watching animes, I have always wanted to visit Japan to see the real things and to improve my Japanese language skills.

Before joining this program, I knew very few things about LGOTP. However, one of my colleagues participated in a similar program with other city before, and she learnt so many things. Therefore, my expectation was quite high and it has been satisfied. Thank you so much for giving me this precious chance.

2. Summary of training:

Tokyo orientation and JIAM

The Tokyo orientation was the gate to the Japanese life and work culture for me. I had been equipped with information about LGOTP 2019 and what to expect during the program. Besides, all the participants were given the opportunities to visit the National Diet Building and Edo-Tokyo Museum. It was a very interesting experience.

The course in JIAM was a meaningful and fruitful time as our Japanese language skills made great progress thanks to the effort of all the teachers and staff of JIAM and CLAIR. I was moved many times because of the teaching method and how you carefully look after our physical and mental health.

We also got to prepare ourself for the training period at the local governments with a lot of information about local lifestyle, natural disasters in Japan, tips to live in Japan as foreigners, etc.

Sakai City, Osaka Prefecture

During my training period in Sakai, I was provided with interesting newsletters and related documents about the city, visited places of interest, attended the festivals and culture events and learned so many things about the city. Based on those experiences, I created half-day and full-day tour flyers, and newsletter to introduce about Sakai to my fellow Da Nang citizens. Besides, I was lucky to be friends with a lot of kind people and engaged myself with the everyday life to know more about the local lifestyle and culture.



Picture 1: Introducing Da Nang City to the citizens



Picture 2: Elementary Vietnamese Language Class for Sakai City officials

One of my main responsibilities in Sakai was to spread the knowledge about Da Nang and Vietnam to Sakai citizens. I made flyers, posters, presentations, and did some PR events to present Da Nang and its charm. I also hold an elementary Vietnamese class for the city officials and a Vietnamese culture presentation for the citizens, did the Vietnamese translation, as well

as supported and participated in the seminars, events related to Da Nang and Vietnam.

Besides, I gained varied knowledge in assisting the 2019 Sakai ASEAN Week. My visit to the city clean center, Sanpo Sewage Treatment Plant, the water supply department, Takemoto Piano, Kubota Corporation,... gave me very interesting information that I had known nothing before.

All of those events, which most of them was my first, concluded my fruitful training period. Thanks to the support of my trainer, everyone in the Sakai International Department, all the teachers and staff of JIAM, CLAIR and ARC Academy, I learned

a lot of things about Sakai City and Japan, improved my Japanese, experienced the local lifestyle, and observed the people and culture. I also tried to introduce about Da Nang and Vietnam to everyone I had the chance to meet with. Hopefully my little effort will somehow helpful to the relationship between Da Nang and Sakai.



Picture 3: Experiencing Kimono with the science and technology students of 2019 Sakai ASEAN WEEK

3. Plan upon returning to your home country:

I have started applying what I have learned to improve my own productivity. Instructed by my trainer and after five months being trained at the ASEAN Exchange Promotion Division, I learned how to make a detailed schedule to finish a job, how to prioritizing the assigned tasks, etc. I have followed those methods for a few weeks and have been receiving good results since then.

Moreover, I'm sure all the things I learned about holding a big event such as Sakai ASEAN Week will be very useful in similar tasks as my Center tends to hold several seminars, meetings and gathering periodically. I will also share the knowledge I gained with my colleagues and friends.

One of my main duties after returning to Da Nang is to spread the knowledge about Sakai City to everyone here through a lot of pictures and stories. About all the things I have learned and experience, about its charm and the kind hospitality I received there.

Last but definitely not least, I will assist all the events related to Sakai City and Japan when requested, using all the information I obtained during the training period. As Da Nang City and Sakai City established friendship city relationship, I hope I can contribute to the development of the two cities' relation. In order to achieve this goal, I will continue updating news about Sakai and Japan and improving my Japanese language skills.

令和元年度 自治体職員協力交流事業の報告について

自治体名	大阪府堺市
研修員名	ダン・ティ・フオン・トゥイ
出身国	ベトナム社会主義共和国
派遣元	ダナン市
研修分野	国際協力、一般行政
研修期間	6 カ月
主な研修先	堺市文化観光局国際部アセアン交流推進室

(1) 背景

堺市とベトナム社会主義共和国ダナン市は平成31年2月23日に友好都市提携を行い、人材教育、経済、観光及び文化スポーツの分野で交流を進めている。

本年度より職員相互派遣を行うに当たり、自治体職員協力事業を活用し、協力交流研修員としてダナン市職員ダン・ティ・フオン・トゥイさんを受入れ、研修を実施した。

(2) 研修の内容

研修開始時は研修員の日本語能力が高くなく（日本語能力試験5級）、ごく簡単な会話、読み書きしかできなかったため、職場での日常会話は英語が中心であった。ただし、本人の日本語に対する学習意欲は高く、市が主催する日本語教室への参加、周囲の職員がまずは英語で説明し、平易な日本語で言い換える、易しい単語のみで話しかける、覚えやすく頻度も高い表現を選んで教えるなど工夫することにより、日英二言語でのコミュニケーションが次第に可能となり、研修員の日本語能力向上につながった。

以下に述べる研修の中には、あえて日本語のみの運用を求めたものもある。研修員は苦勞しながらも努力を重ね、当市職員や市民と有意義な交流が可能となった。

(a) 堺市とダナン市の交流促進

ダナン市にて開催される「ダナン越日文化交流フェスティバル 2019」には、当市の市民文化団体（茶道・表千家同門会大阪支部、和菓子職人）や市内大学関係者、当市職員等が参加し、交流を深めている。

研修員は期日が差し迫った中での両市間の連絡調整、日本語－英語－ベトナム語翻訳などを通じて、緊密な連絡体制構築の重要性を実感できたと思われる。

(b) 堺・アセアンウィーク業務

「堺・アセアンウィーク」は、経済、文化、観光、教育など様々な分野で堺とアセアン諸国との協力の強化をめざす事業であり、日本語を専攻する大学生が市内小学校において授業を行う「民間大使」、市内大学での研究交流等を行う「理工系学生」をアセアン10カ国より約2週間招聘している。

期間中は、研修員の母校でもあるダナン外国語大学からの「民間大使」と積極的に交流した。

また、「理工系学生」は英語が共通語であるため、来日前に日本語表現一覧や、日本滞在中に役立つ情報などを提供し、日本で過ごすことへの不安の解消に努めた。来堺中には、市内企業訪問、着物・茶道などを共に体験することにより日本文化への理解を深め、また、高校での交流プログラムに参加することにより、高校生にダナン及びベトナムの文化を紹介し、会話を楽しむ機会を得た。

「民間大使」「理工系学生」にとって研修員は大変心強い存在であり、招聘学生が当市にて意義深い時間を過ごす一助となった。



高校での交流プログラム



理工系学生との堺市博物館見学

(c) ダナン市及びベトナム語、文化の紹介

・「さかい利晶の杜」でのダナン PR

「さかい利晶の杜」とは、堺で生まれた千利休、与謝野晶子をテーマとする記念館である。学校が夏休みの時期、一般来場者で賑わう中、ダナン市の PR 活動を行った。多くの方にダナンの魅力を伝える中で、既にダナンを知っている、行ったことがある方々ともお話しでき、ハノイ、ホーチミンに次いで認知度が上がっていることを肌で感じる事ができた。研修員にとっては市民と直に触れ合える貴重な活動であり、準備及び実施を通して日本語力の向上にも繋がった。

・職員向け「窓口初級ベトナム語研修」

在堺ベトナム人居住者は増加の一途をたどっている。(2009年 136人→2019年 2,879人) 特に直接窓口で住民と接する職員の中には、ベトナム語の必要性を痛感している者が少なくない。このような状況を踏まえ、職員向けに上記研修を実施した。研修員は物怖じすることなく人前に立てるタイプで、講師を立派に勤めることができた。「今後、この研修を参考に勉強し、身につけることが出来れば十分活用できる」「持ち帰って伝達する」等の感想があった。

・市民向け「ベトナム文化講座」

旅行先として安定した人気を誇っていることもあり、市民のベトナムに対する関心は非常に高い。上記講座では特に、独自の文化、旅行、食、言語を中心にお話しした。受講者はお子さん連れのファミリーからシニアの方まで幅広く、講義後はベトナムへの留学体験をお持ちの方などが数名集まって、研修員と話が弾み、市民同士の交流の場ともなった。「ベトナム文化に触れることができ、すごく良かった」「今までよりもベトナムに興味を持つことができ、行ってみたいと思った」などの感想をいただいた。

(d) 行政理解

当市が策定している「堺市国際化推進プラン(改訂版) 追補版」の重点的取組として「多文化共生の地域づくり」がある。研修員は、外国人市民のための生活相談窓口案内やゴミ捨て場のカラス対策のチラシ、区役所の子育てひろばの申込書等の翻訳や、窓口用多言語会話アプリのベトナム語チェックなどを行うことにより、ベトナム人居住者に資する業務を進めることができた。



家原寺配水場見学

また、クリーンセンター臨海工場、三宝水再生センター、家原寺配水場を見学し、当市の廃棄物処理事業、上下水道事業についての説明を受けた。上下水道についてはダナン市の事例を紹介することにより、双方向型の学びの場となった。

(3) 成果

ダンさんはコミュニケーション能力、学習意欲が非常に高く、何事にも真摯に向き合う真面目さを持ち合わせている努力家である一方、フレンドリーな人柄で、当市の職員、市民と多方面にわたる交流を重ね、また日本の文化、生活を肌で感じる中で、国際交流経験、行政知識の習得はもとより、日本語能力も飛躍的に向上した。

両市は友好都市を提携してからようやく一年を迎えたところであり、日本語運用可能な職員が多くないダナン市と、より強固な関係構築を図る中で、当市にて多種多様な経験を積んだダンさんが、今後長きにわたり両市の架け橋としてご活躍いただくことを大いに期待している。

自治体職員協力交流研修員 (中国)

自治体職員協力交流研修員研修報告書

氏 名 朴正林 (ボクセイリン)

出 身 中華人民共和国吉林省

受入自治体 鳥取県

研 修 先 鳥取県交流人口拡大本部交流推進課
生活環境部山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館
交流人口拡大本部まんが王国官房
商工労働部市場開拓局販路拡大・輸出促進課
商工労働部通商物流課



研修内容

月 日	研修内容
5/19	来日
5/20～21	東京でオリエンテーション
5/21 ～ 6/20	滋賀県 JIAM (全国市町村国際文化研修所) で日本語研修
6/21	来県
6/25	台北市立文化国民小学校訪問団随員
6/21～28	鳥取県国際交流財団で日本語研修
6/27	知事表敬
7/1	交流人口拡大本部交流推進課で研修開始
7/21～22	海外大学生インターンシップ受入事業活動に随員
8/14	鳥取しゃんしゃん祭りに参加
8/20	海外大学生インターンシップ 1ヶ月の研修成果発表会に参加
9/4～7	生活環境部山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館で研修
9/17～27	交流人口拡大本部まんが王国官房で研修
9/30～	商工労働部市場開拓局販路拡大・輸出促進課で研修開始
10/13	鳥取県オリジナルブランド米「星空舞」デビューイベントに参加
10/24	東北アジア産業技術フォーラムに随員

10/29	境港市役所、境港管理組合訪問 楽天ネットショップ支援セミナーに参加
11/10	鳥取県フェア「とっとりっち」で松葉カニを販売
1/15	株式会社石田コーポレーション、境港管理組合（境夢みなとターミナル）、 鳥取国際ビジネスセンターを訪問
1/23	マルサンアイ鳥取株式会社の工場を見学 日本貿易振興機構（ジェトロ）を訪問
2/6～7	鳥取県関西事務所、アサヒビール（株）吹田工場、ダイキン工業（株）テ クノロジー・イノベーションセンターを見学
2/13	鳥取城北日本語学校見学会に参加
2/19	大山牛乳農業共同組合と王子製紙株式会社米子工場を見学
3/4	研修報告会兼研修修了式
3/15	帰国

1. 研修報告

（１）はじめに

私は吉林省琿春市国土資源局で働いており、人事、行政管理を担当しています。琿春市は中国、北朝鮮、ロシアの3カ国の国境に接するという特性を生かし経済、文化、自然保護、海洋、観光などの分野で発展を遂げてきました。さらに1991年に「対外開放都市」に、また2012年に「図門江地域国際協力モデル区」に指定され、物流が盛んとなり、現在は国際交流、海外プロジェクトの実施等も重要視されています。鳥取県と中国吉林省は1994年友好交流覚書書を締結し、経済、文化、教育等の分野で様々な交流を行ってきました。鳥取県と吉林省の友好交流に、また琿春市の経済発展に寄与できるよう、研修を通じて日本の仕事の進め方、観光業の振興施策、商工行政だけではなく、日本の文化、歴史、優れた技術等についても学び、将来は鳥取県と吉林省、さらに日本と中国の架け橋になりたいと考え本事業に応募しました。

（２）研修の概要

東京での研修

初めて日本に来た時の期待に胸が高鳴るという気持ちは今でも鮮明に覚えています。来日した翌日に簡単なゲームを通じて日本の生活、文化、経済発展状況、注意事項などの紹介があり、世界のあちこちから集まった23名の研修生は日本での新しい生活を始めることになりました。研修期間中には江戸東京博物館と国会議事堂を見学しました。

① 滋賀県 J I A Mでの研修

5月22日滋賀県大津市にある全国市町村国際文化研修所（J I A M）に移動しました。ここで1ヶ月間日本語の研修を受けました。1ヶ月は短い時間ですが、勉強、ホームステイ体験、観光、スポーツなど毎日とても充実していました。中学校から日本語を勉強してきましたが、大学や大学院では日本語専攻ではなかったため、就職してから日本語で仕事をする機会は全くありませんでした。J I A Mで日本語を勉強するうちに、だんだん日本語に慣れ、生活にも慣れてきました。週末にはクレア主催で行われた課外研修に参加しました。日野町での伝統文化体験やホームステイ、京都市市民防災センターでの地震、台風、洪水、火災などの体験を通して日本の生活、食文化、礼儀作法やマナーについて学ぶことができました。研修最後の発表会では様々な国の研修員の発表を通して異国の文化とか歴史、生活スタイルに関して理解することができました。総じてこの1ヶ月の研修で鳥取での研修への期待も高くなりました。



全国市町村国際文化研修所で

② 鳥取県交流推進課での研修

6月21日から鳥取県での研修が始まりました。26日からは鳥取県国際交流財団で日本語研修も始まりました。

6月には台北市立文化国民小学校と鳥取市湖南学園との学校交流に随行しました。湖南学園と台北国民小学校は平成29年1月姉妹校締結を結んで以来、3度目の訪問だと聞きました。当日は日台遊び体験交流、文化交流（茶道、華道、書写）、給食体験が実施されました。私は主に茶道の先生の通訳をしました。今回の文化交流の通訳を担当して、日本の伝統的な茶道文化についての理解が深まりました。

7月には海外大学生インターンシップ受入事業に随行しました。鳥取県では2011年度からインバウンド対策として海外大学生を対象に県内インターンシップを実施しており、今年で9回目を迎えたと聞きました。今回は台湾と香港の8大学の大学生45名が参加し、温泉旅館とレストランで「おもてなし」とか「接客サービス」の研修を受けます。

それぞれの研修が始まる前に、今回は海外に鳥取県の情報を発信するためのスマホ撮影や、日本の接客マナーについて研修を受けました。接客マナーでは、普段はその違いに気づきませんでしたが、お辞儀をするとき「ありがとうございます」は45度で、「よろしくお願いします」は30度でとか、笑顔の重要性などいろいろな接客対応を学んでいました。

また、今回の随行で砂の美術館に行き、初めて砂像の魅力を知りました。第12期展示は南アジア編で、10ヶ国21名の砂像彫刻家が集まり、茶園勝彦氏の指揮のもとに制作したそうですが、想像以上に迫力がありました。

8月には、海外大学生インターンシップの研修成果発表会に参加しました。学生は自分が見て、聞いて、感じた事を発表しましたが、1ヶ月の研修を修了して仕事に対する熱意など皆の成長が伺えました。大学で学ぶことも重要ですが、社会経験を積むことも非常に重要です。何もしない人間には、チャンスはやってこないのだから、大学で勉強するだけでなく、社会で成功する道にいつも目を向けることも大切だと思います。

③ 山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館での研修

9月には4日間、山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館で研修を受けました。自然館では来場者のために、鳥取の観光地や、鳥取の海、化石、ジオパーク、砂丘の歴史の流れ、そして、海の中の様々な生き物など山陰海岸の魅力を様々な資料や映像でわかりやすく紹介されていました。館内ではインターネットによる案内の説明を中国語に翻訳しました。また、山陰海岸、豊岡市の玄武洞、香住にある兵庫県の余部鉄橋を遊覧しながら、生き物の多様性、ジオパーク玄武洞の神秘性、余部鉄橋歴史についても学びました。週末は鳥取県主催の「BE-PAL 山陰海岸ジオパークトレイルハイク&キャンプ」に参加しました。参加者の皆さんと一緒にしゃべったり、一つのチームとしてお互い助け合ったりしながら、自然歩道を15km歩きましたが、団体精神さらに日本人のサービス精神に深く感銘を受けました。リーダーの強い責任感とユーモアのある解説、参加メンバーの団結、係員の熱いサービスなど、日本人にとって相手を気遣い思いやることは当然のことなのだと思います。

④ まんが王国官房での研修

9月後半にはまんが王国官房で研修を受けました。実はまんが王国官房のような課は中国の政府機関にはありません。このような課は日本では鳥取県だけだと聞きました。まんがを活用した地域づくりをめざして、県政だよりなどで行政施策をまんがで紹介したり、パンフレットとポスターを作って鳥取県を分かりやすく親しみやすく宣伝したりするのはとても面白い試みです。私はパンフレットや漫画を一冊翻訳しました。

⑤ 販路拡大・輸出促進課での研修

10月には東京スカイツリータウン「ソラマチ」での鳥取県オリジナルブランド米「星空舞」デビューイベントにスタッフとして参加しました。社会人になってから初めてこのようなイベントに参加しました。イベントを通じて地域の名産品を大都市圏で宣伝するのはいい方法です。一日中忙しかったですが、とても充実した一日を過ごせました。来場者は試食して、アンケートに答えたらゲームができて、プレゼントをもらうことができます。イベントは当然経費がかかりますが、将来の売り上げにつながる投資になると思います。

10月下旬には第9回北東アジア産業技術フォーラムに参加しました。今年は鳥取県、吉林省、江原道が友好交流締結25周年を迎えました。私は訪問団に随行して米子市丸京製菓株式会社の工場を見学しました。この工場では主にどら焼きを製造していますが、工程管理は大変厳格でした。工場に入る時には服や靴などの細かい部分まで厳しく一つ一つチェックされました。主に技術の応用、人員の管理、生産の行程、市場の調査、輸出販売等 について説明を受けました。



今回のフォーラムは<資源共有、協力共勝> 第9回北東アジア産業技術フォーラム現場で
を目指して鳥取県、吉林省、江原道の各代表者が各地の技術の発展状況、研究成果を発表して、意見交換を行いました。それぞれの国の文化は異なりますが目標は同じです。それは産業振興や技術開発を通じて豊かな生活を目指すということです。

今回のフォーラムを傾聴して、科学技術は第一の生産力でありその重要性が深く理解できました。地域の発展は産業と切り離せないし、産業の発展は科学技術の進歩と切り離せないし、さらに科学技術の進歩は優秀な科学技術研究チームすなわち人材が不可欠であると思います。今回のフォーラムはととても勉強になりました。

また10月下旬の29日には、米子市で開催された楽天ネットショップ支援セミナーに参加しました。楽天担当者が今まで自分が経験した事を基に豊富な例をあげてネットショップの申請、経営戦略、管理方法、販売などについて具体的に説明しました。その中でとりわけ印象が深かったのはアフターサービス精神でした。お客さんあつてのネットショップを忘れないように、ということでしたが、日本はいつもサービスを大切にしています。もちろん、中国でもサービスを大切にしていますが、おもてなしについてはまだまだ学ぶべき事があります。

11月には名古屋に行って、鳥取松葉カニ販売イベントにスタッフとして参加しました。このイベントは毎年開催されると聞きました。販売イベントに参加したのは二回目でしたが、今回はデパートの中で直接販売しました。やはりカニは人気があるので思ったより売り上げがあり、鳥取の松葉カニだと言ったらお客さんもよくわかってくれました。今はメディアを通じて地元の商品をアピールする事をよく行っていますが、あまり効果がない場合もあります。ですから、地元の商品を宣伝するため、産地ごとに特別な名前をつけてその地域ならではのブランドを作って差別化をはかり、県庁職員が直接現場に行って販売して、市場調査を行い分析するのは良い取り組みだと思いました。

⑥ 通商物流課での研修

1月には米子市の株式会社石田コーポレーション、境港管理組合（境夢みなとターミナル）、鳥取国際ビジネスセンターを訪問しました。石田コーポレーションは上下水道資材、住宅設備機器、土木環境資材取扱商品などを取り扱っています。そして、中国吉林省延吉市にもグループ会社の延辺大山商貿有限公司があります。中日貿易の専門商社として2011年から営業を開始し躍進してきました。また、中国で内装と言えばよく中式、韓流、欧風などがありますが、日本風の内装で仕上げる事ができる会社は聞いたことがないので、この分野において中国の企業と技術提携をしたら、新たな事業展開が見込めると思います。

境港管理組合は地方自治法に基づき、鳥取と島根両県で組織する一部事務組合（特別地方公共団体）です。日本で都道府県のみで組織する組合は境港が唯一だと聞きました。境港は国際コンテナ、物流旅客ターミナルとして境港市、更に鳥取県の通商物流、経済発展において大きな役割を担っているのがよく理解できました。長春までの物流が大連の港を通して行われていますが、残念ながら琿春市を通らないです。いつかは琿春市の港を経由して運送されるのを期待しています。また姉妹都市である境港市と琿春市間の経済、文化、旅行など様々な分野での交流が盛んに行われ、両都市が共に発展を遂げることを祈っています。

1月中旬には、マルサンアイ鳥取株式会社とジェトロ（日本貿易振興機構）鳥取を訪問しました。マルサンアイ株式会社は主に豆乳を作る食品製造会社です。鳥取工場は2017年6月に生産を始め、現在は生産が軌道に乗り、生産環境から材料の選択、加工、充填、包装まで厳しく管理が行われ、安全、安心な製品を作っているということでした。材料の大豆の大部分は、中国の大豆の一大供給基地である黒竜江省から輸入されているそうです。一番驚いたことは、パッケージのリサイクルでした。飲み終わった紙パックを回収して専門処理場に郵送してトイレットペーパーなどに再生するとは考えつきませんでした。しか

し、消費者が回収に協力するかどうかは難しいところだと思います。

ジェトロ（日本貿易振興機構）は、主に対日投資促進や海外市場における中堅・中小企業の販路開拓や拠点設置などの海外展開を支援する海外スタートアップ支援サービスを行っています。個人的には中堅・中小企業の発展に注目する必要があると思います。大企業の場合、社員に高学歴や高度な技術が求められるので、中小企業に大量の労働力が集中しています。従って人口・人材流失を防ぐためには、中堅・中小企業を誘致して人材を確保すれば様々な問題を解決することができます。いつか鳥取の企業が珥春市に来て事業を発展させるのを期待しています。

2月には鳥取県関西事務所、アサヒビール工場とダイキン工業T I Cを見学しました。鳥取県関西事務所は主に関西圏との経済交流を活発化し、企業立地の推進、鳥取県への就職支援、関西から鳥取への誘客を図っています。そして、関西地区での県産品販売促進や販路拡大も行っています。事務所が鳥取県の宣伝と発展に多大な役目を担っていることがよくわかりました。

アサヒビールは出荷量が国内シェア1番（37.4%<2019年>）を誇り、1889年設立と会社の歴史も古い、有名なビールメーカーです。タンクや製造ラインの設備を含めて製造工程は大変素晴らしいものでした。1分に2500本のビールを生産しているそうですが、そのスピードにびっくりしました。

ダイキン工業は主に空調機器を製造する企業です。約100年の歴史があると聞きました。ダイキン工業は現在中国の格力電器（GREE）と業務提携をし広東省でエアコンを生産しています。ダイキン工業では空気清浄機も製造しているそうですが、残念ながら私は今まで使ったことがないです。しかし今後は中国でも需要が高まり、一般家庭に普及する日が来ると思います。

2月中旬には鳥取城北日本語学校見学会に参加しました。この学校は日本の企業に就職が内定した高度人材（大学）を対象とする1年課程の短期集中プログラムで日本語を学ぶ学校です。学費が少々高いですが、就職がだんだん厳しくなっている昨今、卒業後すぐ期間の定めのない雇用条件で就職することができ、大変効率的ではないかと思います。この学校はベトナム向けに学生を募集しています。最近は何新聞でも人手不足問題の記事をよく目にしますが、外国人採用は、現地への鳥取の企業の進出や投資活動に、更に地域の経済の活性化にも寄与していると感じました。

2月下旬には大山乳業農業協同組合と王子製紙米子工場を見学しました。大山牛乳は中国でもとても人気があります。中国ではあまり牛乳を飲まない私も日本に来て毎日牛乳を飲みました。美味しい牛乳のできるまでには搾乳から、検査、清浄など14の生産過程を通して製品化し、酪農家の心をそのまま皆に届けているということに感動しました。新鮮で自然な味そして、酪農家の心も込めて安全、安心な美味しい牛乳のために努力していることが伝わりました。

王子製紙はスケールの大きい工場でした。普段よく使っている紙ですが、その作り方については特に関心を持っていなかったです。今回の見学を通じて紙ができるまでの大体の流れを理解できました。王子製紙工場はパルプから抄紙、塗工工程まで一貫生産体制で高級塗工紙、白板紙、上質紙を生産する工場です。紙づくりも牛乳の製品化と同様に原料の供給から製品が完成するまで様々な過程を経由しています。ところで少々気になったことがありました。工場に行く途中で車から工場が見えましたが、上から煙が出ています。まさかあれは有害な物質を含む煙かと思いましたが、説明を聞いたら、それは蒸気でした。出来上がった紙をロール状に巻き取りますが、その長さは北海道から九州までの距離だと聞きました。

この工場では、使用済みの割り箸を回収して紙の原料としているそうです。ここでもリサイクルが行われていることに感動しました。

いい勉強になりました。

(3) 交流活動、文化体験など

8月には第55回鳥取しゃんしゃん祭りに参加しました。大体1ヶ月くらい練習を重ねてその成果を発表しました。初めて日本でこのような祭りを体験しました。テレビのニュースで祭りの場面を見たことがありますが、実際に体験したら雰囲気が全然違い、皆一緒に最後まで頑張って踊りとて楽しかったです。伝統文化の継承と発展は非常に重要だと思います。鳥取の皆さん、特に若者がぜひ、受け継いでいってほしいです。

9月には国際スポーツ大会に参加しました。鳥取に来ていつかスポーツをしたいと思っていましたが、なかなかできなかったです。そこでスポーツを通じて世界をつなぐという「UNDOKAI」があると聞いて、すぐに参加を決めました。非常にいい活動だと思いました。日本語で自分の考えを伝えることが一番楽しかったです。色々な国の出身者と日本語でコミュニケーションをしたり、お互いの文化を伝え合うという活動で、日本語の魅力を改めて確認できました。



しゃんしゃん祭りの傘踊り

(4) 帰国後の展望

10か月の研修で様々な物事を見聞したり体験したりしました。そのなかで強く印象に残ったことが二つあります。一つは、工場や企業を訪問して先進的なリサイクル技術と日本人の省エネルギーに対する意識や取り組みです。中国でもこれらを学び導入できたら、琿春市さらに吉林省の工場や企業の生産・経営コストが削減できると同時に、環境保護も進むと思いました。

もう一つは、日本の観光業における『おもてなしの心』です。わたしは鳥取で1か月間、温泉やホテルでインターンシップを終えた香港や台湾の学生の発表会に参加する機会がありました。彼らは、皆日本の『おもてなしの心』の重要性について発表していました。また私自身も、東京に出張した時のホテルや、デパート、レストランなどで中国とは異なる、思いやりのある親切な対応を受けました。観光業は今や吉林省でも世界中でも重要な産業になっており、競合する観光地の間で客を取り合う状況になりつつあります。このような状況で、日本の『おもてなしの心』を学び取り入れることは、世界的な競争の中で吉林省の観光業を更に盛り上げ、地元の経済を発展させることにつながる戦略となります。

鳥取県と吉林省は友好交流締結25周年を迎えました。私の参加した自治体職員協力交流事業は、地域間の技術、経済、文化、貿易、教育など様々な分野の交流を通して人材を育成しています。私は、帰国したら、地元の皆に日本をより良く理解してもらえよう、今回の研修で学んだ知識や日本の文化、仕事の進め方、『おもてなしの心』を地元の人々に伝え、地元の産業や経済の発展、環境保護に貢献し、鳥取県と吉林省、さらに日本と中国の友好の懸け橋となれるよう頑張っていきたいと思っています。

「平成 31 年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修」

自治体名 鳥取県
 研修員名 朴正林（ボクセイリン）
 出身国 中華人民共和国
 研修分野 国際交流、環境行政、まんが行政、商工行政、販路開拓 等
 研修期間 10 か月
 主な研修先 鳥取県交流人口拡大本部観光交流局交流推進課
 鳥取県生活環境部山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館
 鳥取県交流人口拡大本部観光交流局まんが王国官房
 鳥取県商工労働部市場開拓局販路拡大輸出促進課・食のみ
 やこ推進課
 鳥取県商工労働部通商物流課

1 背景・目的

鳥取県の国際施策は「国内外の多様なチャンネル・分野での交流を通じた地域活性化の推進」であり、本事業を通じて、研修員に本県が持つノウハウを習得させるとともに、派遣元自治体と人的交流を深めることで、本県の国際交流施策への協力を得ることを期待している。

2 研修の概要

研修期間（全体）	平成 31 年 5 月 19 日～令和 2 年 3 月 15 日	
	期 間	受 入 先 等
研修期間（詳細） 及び受入先	平成 31 年 5 月 19 日	来日
	5 月 20 日～21 日	東京でのオリエンテーション
	5 月 21 日～6 月 20 日	滋賀県 JIAM（全国市町村国際文化研修所）での日本語研修
	6 月 21 日～28 日	来県、鳥取県国際交流財団でのオリエンテーション・日本語研修等
	6 月 27 日	知事表敬
	7 月 1 日～9 月 3 日	鳥取県交流推進課
	8 月 14 日	しゃんしゃん祭りに参加（県庁連）
	9 月 4 日～7 日	鳥取県海と大地の自然館
	9 月 10 日～13 日	鳥取県交流推進課
	9 月 17 日～27 日	鳥取県まんが王国官房
	9 月 30 日～11 月 29 日	鳥取県販路拡大輸出促進課・食のみやこ推進課
12 月 2 日～27 日	鳥取県交流推進課	
令和 2 年 1 月 6 日～2 月 28 日	鳥取市通商物流課	

	3月2日～13日	鳥取県交流推進課
	3月4日	研修報告会兼研修修了式、送別会
	3月13日	知事表敬
	3月15日	帰国

3 研修実施にあたって工夫、苦勞したこと

(1) 生活面

朴研修員は大学及び大学院で日本語を専攻しておらず、就職後も日本語を使う機会がなかったため、東京での面談の際に日本語能力に自信がないと不安を漏らしていた。この不安を少しでも解消すべく、当課所属の中国人交流員と SNS で繋げるなどし、生活面での不安等を気軽に相談できる体制を整えた。また、担当者が一緒に食事に行くなどして本人の不安をなるべく和らげるよう必要なアプローチをしていった。その他にも、生活面のお世話を鳥取県国際交流財団の担当者に委託しており、概ね一週間に一回は直接朴研修員に会い、体調不良や悩みに対処できる体制を整えていた。

(2) 研修面

朴研修員自身は、N1に合格したいという高いモチベーションを持っていたことから、本人が勉強に時間をかけられるよう昨年度よりも若干出張の回数を減らし、翻訳作業をお願いするなどして、日本語能力の向上に時間を割いてもらった。

そんな中でも、鳥取県について深く知っていただくため、今年度は「まんが王国官房」を新たな研修先として追加し、鳥取県ならではの「まんが」を切り口とした観光振興について学んでいただいた。朴研修員からも、中国にはない試みだと感想をいただいている。

朴研修員には、研修以外にも「鳥取しゃんしゃん祭り」へ参加いただくなどし、鳥取県の伝統文化を知っていただくとともに、鳥取県に愛着を持っていただくためのきっかけづくりを提供した。本人が日本語の学習に熱心であり、鳥取県国際交流財団で行っていた日本語研修についても、日本語の試験が実施された12月頭まで週2回の頻度で行い、朴研修員の要望に沿うよう対処した。



第9回北東アジア産業技術フォーラム

4 成果・課題

鳥取県は平成11年度から自治体職員協力交流研修員として中国吉林省から研修員を受入れており、朴研修員も含めて20名を受入れてきた。研修員は帰国後も本県と吉林省との交流を継続・深化させる上で欠かせない人材となっている。本県と吉林省は1994年に友好交流を開始し、今年度で友好交流25周年を迎えた。これまでの交流の歴史を振り返る上で、人的交流の成果は語らずにはいられないものとなっており、本県と吉林省の交流の核となっ

ている。

今後も環日本海地域の友好交流地域である中国吉林省と幅広い分野で交流を促進し、交通インフラ、物流ネットワークの構築、両地域の経済発展の成果の共有等、国際感覚を育み両地域が世界に開かれた地域となることを目指し、国際交流を積極的に推進していく。

協力交流研修員研修報告書

氏名 : ラハマット・ウィボウオ
出身国 : インドネシア
受入自治体 : 高知市
研修先 : 総務課



I. 本事業に応募した動機

スラバヤ市はインドネシアの大都市の一つとして現在よりいい都市になれるように、努力しています。特に環境問題に力を入れています。一方、日本はインフラが一定すでに整っています。ゴミ処理・下水・街づくりに関する環境問題はすでに発展しています。

高知市とスラバヤ市の姉妹都市関係は1997年に始まりました。今年で姉妹都市関係が成立してから23年になり、自治体職員協力交流事業研修員の派遣は22回になりました。高知市とスラバヤ市の姉妹都市の関係では様々な交流がありました。経済、文化、教育などの交流のほかに人材交流もしています。その中の1つが、今回私が参加した自治体職員協力交流事業（LGOTP）です。

私の所属はスラバヤ市にある郡役所の一つです。サワハン郡の郡役所で働いています。主な仕事は一年間の郡役所の活動予算の計画、住民に対するサービスです。そして、環境に関する仕事もしています。そのため、日本の環境について学びたいと思い、応募しました。

今回の研修で、私は総務部総務課の国際平和・文化担当に配属され、いろいろな環境関係の部署で研修させていただきました。

II. 研修概要

2019年5月19日に来日し、東京と滋賀県にあるJIAMで1ヶ月間オリエンテーションと研修を受けました。その後、高知で約5ヶ月間研修しました。主な研修内容は環境に関することです。ゴミ分別、ゴミ処理、そして下水について勉強しました。説明を聞くだけでなく、実際に体験し、身をもって理解しました。研修内容は以下のとおりです。

a. ゴミ分別

日本のゴミ分別は厳しいですが、参考にできると思います。日本人は小さいときからゴミ分別の重要性を教わります。ゴミ分別はほとんどの人ができているので、ゴミ収集とゴミ処理がしやすくなります。

スラバヤ市のゴミ分別は、生ゴミのようなコンポストとして再利用できるゴミと再利用できないゴミに分けられます。高知市では燃えるゴミ、燃えないゴミ、リサイクルできるゴミ、粗大ゴミに分けられます。

燃えるゴミとは生ゴミなど燃やすことができるゴミということです。燃えないゴミはガラスや陶器などです。リサイクルできるゴミは紙や布、ビンや缶などです。粗大ゴミは一ヶ月に一度しか出せない大きいゴミ、家具、衣類などのゴミです。

b. 再生資源処理センター（缶、金属、蛍光灯、布などのゴミ）

高知市では缶やビンのようなリサイクルできるゴミは一ヶ月に一度出せますが、スーパーや自動販売機にも缶とビン専用のゴミ箱があります。再生資源処理センターでは集まってきたゴミを種類ごとにまとめたり、圧縮したりして、リサイクル施設まで送ります。

c. 減容工場、プラスチックゴミの処理場

この施設に集まったプラスチックのゴミを整理し、圧縮します。ペットボトルの場合は細かく切って、リサイクルしているところに送ります。プラスチックゴミには時々プラスチック以外のものが混ざっていますので、選別してから圧縮しています。

d. 高知市清掃工場

この清掃工場は2002年から使用されており、延べ面積は28、711 m²です。焼却炉が3基あり、一日600トンまでのゴミが焼却できます。ゴミを焼却するときに発生する熱は、ボイラーにより蒸気として回収し、発電を行います。発電設備（最大9、000kW）によって発電した電力は工場を動かす電力や、工場内の冷暖房に使われています。余剰電力は電力会社に送り、売却しています。

この清掃工場は建てる前、汚れや悪臭などのイメージなどから周辺住民の反対を受けましたが、説明や交渉を行った結果、住民も納得

しました。実際、高知市の清掃工場はきれいで、においもほとんどありません。発電した電気もヨネッツ高知という余熱利用温水プールへ供給しています。



中央監視制御室

e. 雨水・下水の処理

高知市は日本の中でも雨が多い都市のひとつです。台風や雨の日が多くて、洪水の可能性が高い地域です。洪水が起きたら、建物や人に被害が出るだけでなく、洪水とともに出てくるゴミなどが水汚染の原因になります。そのため、高知市はそれを防ぐために以下のことを行っています。

- 洪水がよく発生するところには、雨水が下水道に入るような仕組みにしています。雨水ポンプを整備しています。
- 運河、下水道、各川の出入り口にフィルタースクリーンを設置しています
- 雨水と下水を分けます
- 下水処理場をたて、下水を川に放流する前に処理します



高知市の生活排水処理

- ① くみ取り し尿はくみ取りタンクへ。たまったらバキュームカーで処理施設へ運びます。生活雑排水は側溝や水路へ。
- ② 単独処理浄化槽 し尿は浄化槽に入ります。浄化槽にたまったらし尿は槽内で処理され、きれいになった水と生活雑排水が側溝や水路へ流されます。
- ③ 合併処理浄化槽 し尿と生活雑排水が浄化槽へ。槽内で処理され、きれいになった水が側溝や水路へ流されます。
- ④ 下水道 し尿と生活雑排水が道路に埋め込まれた下水道管に入ります。最終的に下水処理場で処理してから河川に放流します。

雨の日が多い場合、洪水になる可能性が高まります。そのため洪水にならないように、雨水をポンプして、処理せずに直接川と海に放流します。

高知市の下水道は2種類あります。合流式下水道と分流式下水道です。合流式下水道は、汚水と雨水を一本の下水管で排水する方式です。一方、分流式下水道は汚水と雨水を別々の下水管で排水する方式です。高知市は両方使っていますが、多く使用されている方式は合流式です。昭和45年の法改正以降は分流式が採用されていますが、高知市の下水道は比較的早く設置されたので、合流式が多いです。昭和45年以降に設置した下水道は分流式になります。

3. 帰国後の展望

この研修を受け、様々な知識を得られました。特に環境に関する知識を学びました。しかし、得た知識を全部スラバヤ市に応用することは難しいです。やはり文化や環境に関して意識も違いますので、すぐに高知のような整った制度にすることは難しいです。しかし、得た知識をスラバヤ市に活用したいと思います。スラバヤ市の状態と照らし合わせると、参考にできることがたくさんあります。インドネシアに帰国したら、まず高知で学んだ環境についての報告書を書き、そしてスラバヤ市の環境問題への対応に参考となるレポートを作ります。そして、関係するスラバヤ市の部局に提出します。

令和元年度自治体職員協力交流事業報告書

～ 自治体職員協力交流研修員の受け入れについて ～

自治体名 高知県高知市
研修員名 Rahamat Wibowo (ラハマト・ウィボウオ)
出身国 インドネシア共和国
研修分野 一般行政
研修期間 6か月
主な研修先 総務部総務課

1 背景・目的

本市では、平成9年にインドネシア・スラバヤ市と姉妹都市提携を行い、以降、文化・教育・経済等さまざまな分野で交流を続けている。

平成10年度から毎年（ただし、平成27年度を除く）本事業を活用し、姉妹・友好都市提携を結ぶ海外の自治体との交流の一環として研修員の受け入れを行ってきた。今年度は22人目となる研修員をスラバヤ市から受け入れ、行政研修を行った。

2 研修の概要

東京でのオリエンテーション、J I A Mでの研修を終えた6月下旬から9月中旬の約3か月間、市内の民間日本語学校において語学研修を実施。午前中は総務課で自治体組織についての理解を深めながら学校の予習・復習、午後は日本語学校の授業に取り組んだ。授業では、茶道などの日本文化体験も行われた。

また、毎年8月に開催されるよさこい祭

り本番に向け、7月から毎日練習を続け、高知市役所踊り子隊として参加。高知の文化に触れることができたとともに、よさこいを通じて市役所内外のたくさんの人々と交流する機会を得た。9月末にスラバヤ市から教育交流訪問団が来高した際には、訪問団とも交流を図ることができた。11月には地域のお祭りに参加しお神輿を担ぐなどし、日本文化に触れ、地域住民とも交流を深めることができた。

よさこい祭りに参加



日本語学校での語学研修を終えた9月中旬から、行政研修を実施。研修内容は、研修員の母国における担当業務に関連のある環境に関する部署（ゴミ処理・下水処理など。）を中心に行った。

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと



ゴミ収集体験をする研修員

行政研修は、座学や見学だけではなく、実際に体験してもらうことも取り入れた。ゴミ処理の研修では、不燃ゴミが収集される様子や、リサイクルゴミが処理される様子を見学した後に座学を受け、その後実際にパッカー車に乗り、ゴミ収集体験も行った。収集後は清掃工場も見学し、高知市のゴミがどのように処理されているのかを、はじめから最後まで、多角的に学べるように工夫を行った。

下水処理場等の見学も行い、積極的に質問する様子が見られた。

研修期間中は、研修員の母国・インドネシア出身の国際交流員が身近におり、日常生活面での困ったことを相談したり、市内のインドネシア人同士の交流に参加したりできる環境を作ることができた。

課内でも、職員と日本語や英語を用いて積極的にコミュニケーションを取っており、日本語力の向上につながったようである。

4 成果・課題

本事業を通して、研修員と研修先担当者が業務に関する情報を共有することができ、そこからさらにスラバヤ市が抱える環境の課題について、具体的に知ることができた。また、研修員を通してスラバヤ市行政への理解を深め、本市の国際化を進めることにつながられた。

今後の研修実施における課題としては、研修員からスラバヤ市の行政の現状を把握し、相互の情報・知識の共有により両市の業務の効率向上等に活かさればと考えている。

また、研修員には帰国後も本市での研修で修得した経験や知識を活かし、スラバヤ市の課題解決や、市民への環境問題への啓発等に取り組んでいただきたい。また、両市をつなぐ架け橋として、交流を支えてもらい、今後の友好関係をさらに深められることを期待している。

日程	研修内容
6～9月	語学研修：日本語研修 地域行事等に参加
9～11月	《一般行政研修》 総務課・環境政策課・環境保全課・環境業務課・廃棄物対策課・上下水道局下水道施設管理課・高知市清掃工場

Final Report for Local Government Officials Training Program 2019

Name MS. KHIN SAN WIN
Country MYANMAR
Host Institution FUKUOKA CITY
Training Facility Fukuoka City Waterworks Bureau



1. Reasons for applying for this program

Myanmar, one of the developing countries, is going to improve in various sectors. Yangon City is the center of economy, business, and communication. And thus, Yangon City Development Committee has responsibility to improve in each sector including water supply, communication, building construction, electricity and other facilities for citizens.

The Group In charge of Water Supply and Water Supply Industries, Engineering Department (water & sanitation) under Yangon City Development Committee is supplying domestic water to citizen daily as of main responsibility. At the same time, we are facing many problems and challenges on water supply system. The main challenges are high leakage in pipelines, poor water quality, and intermittent water supply period in currently. Therefore, we would like to study the water supply technologies that can support to improve our current condition and solve the challenges in systematic way.

2. Summary of Training

I have started to join the LGOTP in Tokyo on 20rd May, 2019. The participants moved to Japan Intercultural Academy of Municipalities (JIAM) in Shiga prefecture on 23rd May, 2019. We have studied about Japanese language and cultures about one month over there. Then, I left JIAM on 21st June and arrived Fukuoka City.

I have studied about the outline of Fukuoka City, plan for compact city, next Fukuoka and about Hakata port by lectures and site visits.

After that I started to join our specific program at Fukuoka City Waterworks Bureau.

During this training, we have learned water supply technologies and management of water utility. In details, we studied water supply facilities management, water treatment technologies, water sources conservation, operation and maintenance of water utilities, Mapping system, information system as well as public relation.

Figure 1. Titrate with acid to test the fertilizer content in water



We have also joined two of JICA training programs for Non-revenue water management and sewerage system with other participants from different countries. Likewise, I learned many skills, such as leakage detection, pipe repairing work and house connection from distribution main to tap for Non-Revenue Water management and some water quality test by lectures and practices.

As of the gained knowledge from that program, I could understand the systematic management and developed techniques to supply safe and potable drinking water to customer to be satisfied.

The title of my action plan is the Chemical Feeding for Water Treatment. This action plan is intended the water quality management for new water treatment plant, Lagunbyin. It will operate to start soon.

Figure 2. Electric Valve control testing



Figure 3. 150mm Φ Ductile Iron pipe tapping work for house connection



3. Plans upon returning to your home country

After completing this training program, I would try to apply my gained knowledge and know-hows in the development of our water supply system. And also, I will definitely

share what I learned to my colleagues in my organization. At first, I will submit my action plan to my head of department and other officers. After getting approval, I would start to implement my action plan as my best. I will continue to work my current position and I will try to cooperate with other activities with regard to this training program.

「令和元年度自治体職員協力交流事業 報告書(福岡市)」

- 自治体名 福岡県福岡市
- 研修員名 **Khin San Win**
- 出身国 ミャンマー連邦共和国
- 研修分野 水道
- 研修期間 6ヶ月
- 主な研修先 水道局

1 背景・目的

福岡市は、これまで培ってきた「住み良いまちづくり」の技術やノウハウを活かした国際貢献・国際協力を推進しており、特にミャンマー・ヤンゴン市については国際貢献を通じた行政間交流を契機に平成28年12月、日本・ミャンマー間で初となる姉妹都市となっている。

本事業はヤンゴン市における都市問題の解決と、両市の友好関係をさらに深めることを目的に、ヤンゴン市職員の研修を実施するものであり、平成26年度から継続して取り組んでいる。当初は水道分野で実施し、平成29年度からはごみ処理等の環境分野を追加、平成30年度には浸水対策を中心に道路下水道分野を追加した。令和元年度は、水道分野において1名の受け入れを実施した。

2 研修の概要

エンジニアである研修員の専門分野に重点を置きながら水道行政全般について研修を実施した。

研修開始時には自国の状況・課題を発表する会を、研修終了時には学んだことを自国でどのように具体的に役立てるかを発表する会を水道局で開催した。

その他、市民体験型のイベント、姉妹都市ヤンゴンの文化紹介イベントなどへの参加を通し、市民との交流を図った。



研修風景(浄水場)



研修風景(ダム)



研修風景(研修所)

3 研修実施にあたって工夫、苦勞したこと

研修・研修員とのコミュニケーションは英語で実施した。ただし予算面の制約および市職員の国際感覚醸成・語学力向上のため、プロの通訳・翻訳は要所に留め可能な限り市職員が実施した。また、簡単なミャンマー語を職員

用にまとめることで、職員と研修員との積極的な交流が図れる環境を整えた。

研修においては、講義だけでなく、現場視察や実習を取り入れることにより、研修員の理解がより深まるよう努めた。また研修分野が多岐にわたるため、施設建設までの流れに沿った順で研修を行う、分野毎に日程を固めるなど、体系的な理解が得られるように努め、自治体では教えることが難しい技術については民間企業にも協力を頂いた。さらに、定期的に不明な点やニーズを確認し、理解度や要望に応じて研修メニューをアレンジした。加えて、JICA 研修に同行させるなど、他の研修プログラムを有効活用することで、他国研修員と交流・連携し、研修効果を高めた。

生活面においては通勤や買い物が便利な地域での居住など、生活環境にも配慮するとともに、生活に慣れるように市職員が研修員をサポートした。研修員は休日などを活用し、福岡市内外の観光や職員が自発的に企画したイベントに参加したことで、日本の文化や風習の体験と、職員との交流を深めた。

また両市の姉妹都市関係に基づき学校給食にミャンマー料理が提供された際、研修員が学校を訪問し、生徒に対してミャンマーの食文化を中心に様々な説明を行い、国際交流に繋がった。



水源林保全活動への参加



他国研修員を含めた交流(野球観戦)



学校給食で自国を紹介

4 成果・課題

本研修を通じ、研修員は福岡市が培ってきた技術・ノウハウを学び、ヤンゴン市の所属に必要と考えられる「アクションプラン」を完成させた。さらには研修員が帰国後に研修員から所属に向けてアクションプランの発表も行った。ヤンゴン市職員間で研修成果が共有されたことで、プランの実行に基づく改善が期待される。

また職員がヤンゴンに渡航し活動を行う際には、これまでの研修員が両市の調整役を積極的に担うなど、両市の信頼・協力関係の強化を実感している。

一方、福岡市とヤンゴン市では都市の特色等に相違点があるため、ヤンゴン市の環境改善に向けては、様々な改善策を比較検討していく必要もある。

今後は、アクションプランのフォローアップ等を行いながら、本市からヤンゴン市へ派遣中の職員との連携等により、さらなる国際貢献・国際協力に取り組む。そして、国際貢献・国際協力を通じて構築された信頼関係を基に、官民連携による海外事業案件の受注や地場企業等のビジネス機会の創出を図り、ヤンゴン市の都市問題解決と地域経済の活性化に繋げていきたい。

研修を通して、人生の目標が明らかになった

氏名 リ テイ
出身国 中華人民共和国
受入自治体 大分県
研修先 大分県庁企画振興部国際政策課、中和国際株式会社、ツーリズム大分



1. 本事業に応募した動機

湖北省黄石市下陸区はいま「歴史の町、現代の町、未来の町を作ろう」ということに力を尽くしています。下陸区は東方山という観光地や民俗風情を持つ村など豊かな資源があります。しかし、資源がそれぞれに分散し、どのように観光の価値を掘り起こし、生かして継続していくかということを考えています。大分県は「日本一の温泉県」として、観光施設の整備と推進経験はとても優れています。なので、今回の研修を契機に、行政と観光分野において大分県の先進的な経験と方法を勉強したいと思いました。

2. 研修の概要

本研修は東京研修、JIAM 研修と専門研修に分れています。東京で江戸東京博物館や国会議事堂などを見学し、日本に対する基本的なイメージが形成されました。JIAM 研修を通して会社や日常生活の中でよく使われている日本語と生活技能を習得しました。専門研修では行政を効率化する方法と観光誘致手法などを習得しました。

今回の専門研修は大分県庁企画振興部国際政策課、中和国際株式会社とツーリズム大分の三つのところで行われました。

国際政策課では、学校教育現場の見学、留学生スタディーツアー同行や大分県外国人総合相談センターとEU講演会の出席、中国語フリートークの参加などをしました。

中和国際株式会社では、県内あちこちを回って観光ツアーの素材を収集し、インバウンド関係業者と意見交換のため推進協議会に参加して旅行業務実務についての研修をしました。

ツーリズム大分では農泊と教育旅行のパンフレットを翻訳し、ホテルを訪問してインバウンド消費の情報を宣伝し、ラクビーワールドカップで来日した欧米豪のお客様にアンケート調査をしました。また、大阪で行った「ツーリズム EXPO ジャパン 2019」



JIAM 研修終業の時の中国研修員の記念写真

という展示会に参加し、誘客手法などについて研修をしました。それらを通して主に下記の事を学びました。

2-1 移動が一番大きな特色

日本では専門的な職員だけあまり移動しないが、ほとんどの職員達は大体3年間ぐらいで移動します。移動は癒着を防げるメリットだけでなく、多能工の育成にも役に立ちます。繁忙期の時、多能工はスムーズに業務を応援できます。特定の人への負担を防ぎ、残業の発生も抑制でき、仕事の能率を高められます。

2-2 シェアアプリを生かす

仕事の能率を高めるために、日本はイントラネットシステムと勤務時間管理システムなどのようなシェアアプリも生かしています。イントラネットシステムでは同じな事務室の職員達の日程が見られます。会議室を予約するとかメールを送るとかいろいろな機能も持っています。事務室の中で、仕事の情報の交換が簡単にでき、とても便利です。



2-3 学生達の職場体験を重視

大学生だけではなく、小学生と中学生の職場体験も重視しています。例えば、今年の夏休みに、国際政策課だけでも学生達の職場見学を3回受けました。

学校交流の通訳担当の際の様子

2-4 観光PRに広域連携を重視

大分県は連携意識を持ち、県内だけではなく、九州の他の地域(例えば福岡県、熊本県など)との連携も重視しています。それぞれの観光資源を合せ、旬の情報を更新してパンフレットを作ったり、観光ブースを国内外で定期的に行ったり、「テッパン!大分」というネットホームページで情報を提供してバスツアーを作ったりして発信しています。また、スポーツや大きなイベントなどを契機に、観光スポットやグルメ(郷土料理も含め)、伝統文化、伝統工芸、農泊、学校交流などの体験を融合してPRしています。

2-5 地元のことを自慢する

観光の発展はそれぞれの違いを尊重しつつ、オリジナリティーを大切にしています。自然を守り、伝統を継ぎ、住民達は地元のことを自慢している点にとっても感心しています。そういう住民達の誇りは絶対必要だと思っています。また、学校でも故郷のことを愛し、故郷で働くように導いています。その他に、各地では多言語対応の充実とかボランティアなどの人材の育成にも力を尽くしています。

2-6 統計データの分析を重視

旅行会社やホテル、観光スポットの受付、アンケート調査、ネットホームページの登録数量などを統計し、お客様のニーズをとらえ、欠点をまとめて改善しています。また、インバウンド関係業者と意見交換のため推進協議会のように、お客様と一番近く接触している関係業者は問題点と対応解決のアドバイスをしています。それらに基

づいてインフラ（レンタルカー、レンタル自転車、駐車場を含めて移動しやすい交通基盤とトイレなど）の整備、パラダイムシフト（キャッシュレス化など）、サービスの提供などを改善しています。

2-7 キャラクター経済の形成

日本の各県は自分を代表できるキャラクターを持っています。例えば、大分県を代表するのは「めじろん」で、熊本県を代表するのは「くまモン」です。大分県内の観光スポットでもキャラクターを持っています。例えば、高崎山を代表するのは「たかもん」で、宇佐神宮を代表するのは「ラッキーウサ」です。キャラクターは代表として雰囲気盛り上げるだけでなく、商品として販売でき、経済効果も期待できます。



2-8 観光案内所は便利な存在

日本では観光案内所が多く見られ、無料で観光スポットの情報や交通アクセスなどを教えてもらえます。個人旅行が流行っている現代で、観光スポットの宣伝を拡大し、より良いサービスを提供するために、観光案内所はとても必要な存在だと思います。

「ツーリズム EXPO ジャパン 2019」という展示会で大分県ブース前の記念写真

3. 帰国後の展望

今回の研修を通して日本社会や日本文化に対する認識を深めました。自分の人生の目標も明らかになりました。帰国後、日本で習得した行政や観光などの知識を活かし湖北省黄石市の発展に力を尽くしたいです。また、中国のみんなに日本のいいところを紹介して情報発信したいです。自分も続けて日本語を勉強し、日中友好交流の架け橋としてがんばっていきたいです。半年間は本当にあつという間でした。いつもお世話になった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

事業報告書

「湖北省研修員の受入について」

自治体名	大分県
研修員名	李 婷 Li Ting
出身国	中華人民共和国
研修分野	観光行政・国際交流
研修期間	6か月
主な研修先	企画振興部国際政策課、(公社) ツーリズムおおいた、 中和国際(株)

1 背景・目的

大分県は、海外戦略を策定し、県産業の活性化や、グローバル人材の育成を図っている。中国との交流においては、特に湖北省との関係強化を目指しており、平成25年度から一般財団法人自治体国際化協会のL G O T Pを活用し、中国湖北省の自治体職員の研修員を受け入れてきた。研修経験者との人的ネットワークを構築し、両省県間の貿易・観光・文化交流の架け橋としたい。

2 研修の概要

J I A Mで4週間の日本語研修を受け、来県後は国際政策課を中心に研修を行った。通常は県内で開催される国際交流イベントへの参加、教育旅行現場の視察、中国への情報発信のため県内観光地の視察などを行った。

8月中下旬には中国人旅行客を専門的に手配している旅行社中和国際で5日間の研修を行った。研修では旅行手配の実務などについて学んだ。

9月上旬から8週間にわたり、ツーリズムおおいたで、観光誘客・宣伝の研修を行った。期間中、大阪でのツーリズムE X P Oの大分県観光宣伝活動を行った。

帰国前には、海外で大分の情報を発信する「めじろん海外サポーター」に任命した。

3 研修実施にあたって工夫、苦勞したこと

指導員である職員が常について指導することはできないため、中国人国際交流員が参加する業務やイベントに同行してもらい、できるだけ有意義な研修内容となるように努めた。

観光行政を実地で学ぶため、観光協会であるツーリズムおおいたや中和国際で実地研修を行った。



「めじろん海外サポーター」任命式の様子

4 成果・課題

成果：中国湖北省での人脈形成や相互理解の進展が期待される。

湖北省から7年間に7名の研修員を受入れ、各地域政府に人的なつながりができたことで、今後の多方面にわたる経済・文化交流の足がかりができた。

課題：定期的に国際交流イベントに参加し、国際交流員の業務に同行したため、対外的な活動には参加する機会が多かったが、国際政策課以外の職員と交流する機会を作ることができなかった。湖北省と本県との人的な交流を進めるためにも職員との交流を増やす必要があった。

また、帰国後も随時連絡をとりあい、交流を継続していく体制も確立していく必要がある。